

田中良昭著

『敦煌禅宗文献の研究』

鏡 島 元 隆

周知のように、インドと中国を結ぶ交通の要衝、敦煌が世界の東洋学者の注目を浴びたのは、一九〇七年のスタインと敦煌との出会い以来のことであり、すでに八十年近い歴史を経ている。爾来、敦煌学は東洋学におけるもっとも尖端的な学問として時代の脚光を浴びてきたのであるが、敦煌文献の主要部分をなす仏教文献、なかんずく、禅宗文献の出現は、従来の禅宗史の研究を根本から問い直し、いままで不明とされた中国初期禅宗の思想や歴史の上に、新たな光明を与えるものとして学者の注目の的となったのである。

この分野の研究は、昭和の初期、矢吹慶輝氏によって開拓され、以後、胡適氏・鈴木大拙氏・宇井伯寿氏・関口真大氏・柳田聖山氏等を中心とする秀れた研究者によって積み重ねられてきたのであるが、いまやオルデンブ

ルグコレクションを除くほとんどすべての敦煌文献が、わが国の東洋文庫のマイクロフィルムに完備されるにいたり、それらの調査研究によって、この分野の研究は一段の進展が要望されるにいたった。こうした学界の機運に乗じ、その期待に応えるべく、二十有余年進めてきた研究の成果をひっさげて世に問うたのが、田中良昭教授の新著『敦煌禅宗文献の研究』である。

本書の構成は、第一章伝燈・嗣承に関する諸文献、第二章禅法・修道に関する諸文献、第三章銘・箴・讚・偈類に関する諸文献、第四章その他の諸文献、第五章余論(一)初期禅宗をめぐる諸問題、第六章余論(二)禅宗伝燈説をめぐる諸問題、第七章余論(三)禅宗伝燈説の歴史の展開から成っている。

さらに、第一章伝燈・嗣承に関する諸文献

は、第一節『楞伽師資記』、第二節『付法藏因縁伝』と『付嘱法藏伝略抄』、第三節『祖师伝教西天廿八祖唐来六祖』、第四節『聖胄集』、第五節『壇法儀則』の「付法藏品部第三十五」の五節から成る。

第二章禅法・修道に関する諸文献は、第一節『二入四行論長卷子』(擬)、第二節天竺国菩提達摩禅師論』、第三節『南天竺国菩提達摩禅師観門』、第四節『大乘開心顯性頓悟真宗論』、第五節『請二和上答禅策十道』の五節から成る。

第三章銘・箴・讚・偈類は、第一節『亡名和尚絶学箴』、第二節『隋朝三祖信心銘』、第三節『禅門秘要決』、第四節『行路難』と『安心難』、第五節『大滄警策』の五節から成る。

第四章その他の諸文献は、第一節『三宝四諦文』・『大乘中宗見解』と『法門名義集』、第二節『大乘三窠』・『小乘三科』と『三窠法義』、第三節『円明論』、第四節『仏説法句経』と『法句経疏』、第五節『禅源諸詮集都序』の五節から成る。

第五章余論(一)初期禅宗をめぐる諸問題は、第一節初期禅宗の修道論、第二節初期禅宗の戒律論、第三節初期禅宗における対論、第四

節初期禅宗と密教、第五節初期禅宗と道教の五節より成る。

第六章余論(一)禅宗伝燈説をくめる諸問題は、第一節大照普寂と禅宗伝燈説、第二節禅宗伝燈説における七祖の問題、第三節密教の伝来と禅宗伝燈説、第四節禅宗伝燈説の発展の四節から成る。

第七章余論(三)禅宗伝燈説の歴史的展開は、第一節楞伽の伝統と東山法門、第二節北宗燈史の成立と神会の主張、第三節伝衣説から伝法偈説へ、第四節禅宗伝燈説の確立と仏教諸宗の交渉の五節から成る。

以上の章目を一看して明白なように、本書の最初の四章は敦煌禅宗文献そのものの紹介と研究を旨とした文献研究であり、後の三章はそれらの文献研究の成果に基づいて、初期禅宗と禅宗伝燈説に関する諸問題を考察した歴史的研究といふべきものである。この本書の構成によって知られるように、本書は、従来諸先学によって断片的、個別的にとりあげられてきた敦煌禅宗文献がはじめて体系化されたものであり、敦煌出現の全禅宗文献にわたって広範且つ詳密な総括がなされたものである。正に学者の久しく待望していた敦煌禅宗全文献の集大成と言えよう。以上通読する

に、本書各章において、著者によって発見された新資料、それに基づく従来の説の批判訂正は枚挙にいとまがないが、その一つ一つを挙げることは略し、以下とくに注目すべき点の若干について挙げよう。

本書において注目すべき第一は、第一章第五節『壇法儀則』の「付法蔵品部第三十五」である。この書は、著者が昭和四十七年夏、パリ国立図書館においてペリオ将来の敦煌文献を調査した際発見したP三九一三本である。この文献は不空に仮託した唐末五代に成立した密教関係の偽経であるが、その巻末にある「付法蔵品部第三十五」は、数種の禅宗祖統説を引用しつつ、それに密教的改変を加えた禅密交渉を示す貴重な資料である。本書出現の特筆すべき価値は、従来「唐末禅宗雜記付法事」という擬題でしか知られなかった北京本鹹二九とスタイン本S二一四四とが、著者によって新たに発見された『壇法儀則』の「付法蔵品部第三十五」の一部であることが立証されたことである。この事実を踏まえて、著者は第六章第三節「密教の伝来と禅宗伝燈説」において北京本鹹二九とスタイン本S二一四四の二資料の中に、禅と密教との作為的結合がみられることを明らかにしてい

る。このような禅宗の伝燈説の密教的改変の事實は、第六章第四節「禅宗伝燈説の発展」において明らかにされている、禅宗祖統説の発展の上に密教が関与している事實の解明とともに、著者によってはじめて指摘された新発見であって、禅宗伝燈説の解明に大きく寄与するものであろう。

著者は、ひきつづいて第七章第四節「禅宗伝燈説の確立と仏教諸宗の交渉」において、禅宗伝燈説が『宝林伝』にはじまる西天二十八祖・東土六代説が後統燈史に継承されて禅宗伝燈説の正統の地位を確立したものであることを明らかにしながら、このような禅宗伝燈説の形成発展に天台宗の伝燈説、法相宗の伝燈説、密教の伝燈説が深くかわり合っていることを敦煌文献によって明らかにしている。このことは、禅宗の伝燈説がひとり禅宗の独占物でなく、中国仏教全体の中で他の宗派の伝燈説と交渉しつつダイナミックに発展したものであることを示したもので、著者の視野の広さを示すものである。これが明らかとなったのは、近来発見紹介された敦煌文献の出現によるものであって、ここに禅宗史研究における敦煌文献の果たした大きな役割が存する。

本書において注目すべき第二は、第二章第五節「請二和上答禅策十道」である。本書は従来まったく未紹介だったもので、著者が昭和四十七年春、大英博物館（現大英図書館）に実地調査した際発見したものである。その内容は、南宗系の作者による南北二宗の立場の相違を「空」と「自」の二和上に仮託して述べたもので、二十問答にわたる両者の立場の相違を創作し提供した本書の出現は、初期禅宗思想の研究に貴重な資料を提供したものであって、本テキストの紹介と分析は世界の学界で嚆矢と称すべく、本書中白眉の一節と称し得るものであろう。

本書において注目すべき第三は、第三章第四節『行路難』と『安心難』である。『行路難』については、宇井伯寿氏・関口真大氏・芳村修基氏・入矢義高氏等諸学者の研究があるが、著者は本節において竜谷本系統とS三〇一七系統の二種が存在し、P三〇四九写本が後者の既紹介異本に比してもっとも完璧であることを明らかにしている。さらに注目すべきことは、著者がフランス留学中、パリの国立図書館で実地に調査したP三〇四九を検討した結果、『行路難』は本来、『五更転』・『安心難』という一連の偈頌の一部であるこ

とを明らかにしたことである。『行路難』の作者は従来知られなかったが、著者は『安心難』の著者と同一人であるとして、これらが慧能から神会に通ずる南宗系の禅者の手になるものと推定している。いずれにしても、『安心難』は、従来まったく未紹介のものであって、これを紹介し解明した著者の功績は特筆すべきものである。

本書において注目すべき第四は、第四章第五節『禅源諸詮集都序』である。本書は圭峰宗密の著述としてよく知られ、諸学者による研究がなされているが、敦煌本としては、この書の残巻が台湾国立中央図書館に所蔵されていることが、牧田諦亮氏と香港の潘重規氏によってすでに報告されていた。著者は、東洋文庫についてこれを親しく精査し、同文庫のフィルム番号〇八九一六が『都序』の残巻であることを確認して、これを鎌田茂雄氏の訳註になる『禅源諸詮集都序』と対校し、その内容を紹介している。この作業によって、著者は敦煌本の『都序』の残巻は、五代後周の手になる現存最古の写本の一部であって、宋版系とは別であることを明らかにしている。さらに敦煌本『都序』巻末の題記および目録により、宗密著作の新資料を挙げ、併せ

て敦煌本が四巻本ではなく、上下二巻本であったことを明示している。このことは、教禅交渉の重要な一環である宗密の研究に新しい照射を加えたもので、その資料的価値がさぶる大きいことは、すでにフランスの東洋学者ポール・ドミエヴィルによって「美事な研究」と推賞されている（禅学研究第六一号「チベットのシナ仏教」）。

以上、田中良昭教授の新著『敦煌禅宗文献の研究』についてその注目すべき点を概述したのであるが、本書はA五判七〇二頁におよぶ膨大な論文集である。上述を要約して本書の特質を挙げれば、一、敦煌禅宗文献のあらゆる資料が、原典の写本および影印をより所としていることである。これは、著者が七ヶ月間ロンドンの大英博物館（現大英図書館）、パリの国立図書館に実地調査され、加えて東洋文庫に所蔵されているマイクロフィルムを長年にわたって綿密に調査研究した結果によるものであって、本書の何よりの強味となっている。著者によって従来知られていない資料が新たに発見されたもの、また知られていなかった資料であっても新たに異本が紹介されたものは枚挙にいとまがない。

二、最近にいたる敦煌学者、ないし禅宗史学者の研究成果を十分に踏まえつつ、新資料によってさらにオリジナルな見解が示されていることである。

三、本書は、タイトルは文献研究となっているが、論及するところはきわめて広く、禅宗はもとより、天台・華嚴・密教から道教におよび、単なる文献学的業績でないことである。この点、本書は、現段階において望み得る最高水準の敦煌禅宗研究と言って過言でないであろう。

中国における

仏教・哲学・宗教の新刊書

岡部 和雄

中国における出版活動はなかなか盛んである。以前はほとんど見かけることの少なかった仏教や宗教についての新刊書が、何冊も書店の棚に並ぶようになった。啓蒙的な本がやはり多いが、かなりガッチリした学術書もある。宗教については定期刊行物も創刊され内容豊富である。敦煌に関する論文集がつつぎ

ただ望蜀の言を述べれば、このような敦煌文献の基礎的な研究の上に立って、敦煌禅宗文献全体にわたる総合的体系的研究所、新資料に基づく初期禅宗通史の完成を、今後に残された課題として期待したい。著者のいっそうの精進を祈るとともに、禅の最高学府としての本学の内外における学的地位を名実ともに高めた労著として、本書の刊行を喜びたい。

（大東出版社、昭和五八年二月二〇日発行、A5判、七〇三頁、一五、九〇〇円）

ぎに三冊も出版された。無神論の系譜を探究する本も出されるが、仏教史の研究・出版にも目を見はらせるものがある。網羅的系統的に紹介することなどとてもできないが、私が購入して手許に置いてある新刊書をアトランダムに採りあげ、若干のコメントを加えることにしたい。台湾についてはふれない。

『中国仏教史』第一巻 任継愈主編、中国

社会科学出版社（北京）、一九八一年九月刊。主編者の任継愈（一九一六—）は哲学、仏教学の第一人者。現在、中国社会科学院研究生院教授で、世界宗教研究所所長の要職にある。この第一巻の執筆者は任継愈、揚曾文、劉蘇、黄心川（附録の印度仏教哲学を担当）である。この巻は東漢（日本では後漢という）三国時代の仏教史を扱っているが、全体は五章より成る。

第一章 仏教伝来以前の秦漢時代における中国社会で流行した宗教迷信と方術

第二章 仏教の中国伝来

第三章 東漢・三国時代の仏教

第四章 東漢時代に漢訳された主要經典の

分析

第五章 三国時代に漢訳された主要經典の

分析

各章は二節から七節に区別され、各節には多数の項が立てられている。序一八頁、本文四五八頁、附録四五九—五七一頁、索引五七二—五七九頁。

本書執筆の基本的立場や全八巻の構成などについては主編者の「序」に詳述されている。（なおこの「序」は「仏教と中国の思想